

市民公開講座

9月1日(土) 16:00~17:30

第1会場

古倉 聡

京都学園大学 健康医療学部

片山 寛次

福井大学医学部附属病院 がん診療推進センター

座長

古倉 聡

京都学園大学 健康医療学部

片山 寛次

福井大学医学部附属病院 がん診療推進センター





ハイパーサーミアを併用した集学的治療で癌と上手に付き合いましょう

○古倉 聡

京都学園大学 健康医療学部

現在の日本人の死亡原因の第一位は、依然「悪性新生物(がん)」です。その理由として、高齢者が多くなったから、がんに罹患する人が増えたので当たり前だろう、といわれる人もおられますが、はたしてそうでしょうか？高齢になると心筋梗塞や脳血管障害に罹患する人も同様に増えると思うのですが、死因としての心臓病や脳血管障害は、近年減少しております。これは、予防効果や治療効果が進歩した結果だと思います。では、がんに対しての予防効果や治療効果についてはどうかというと、予防効果は、ほかの2疾患と比べたら、難しいと思います。ただ、早期発見は、随分進歩したと思います。にも関わらず、死亡率が増加し続けるのは、進行癌や再発癌に対する決定的な治療法がないからです。そこががん治療の難しいところなのですが、それなら、いろいろな治療効果の期待できる治療法を併用する、いわゆる集学的治療が期待できます。本日の公開講座では、ハイパーサーミアを併用する集学的治療について、基礎的観点と臨床的治療効果の面から解説いたします。



福井県におけるがん温熱療法の実際

○片山 寛次

福井大学医学部附属病院 がん診療推進センター

福井県では、福井大学医学部附属病院で2種類の温熱療法が行われています。電磁波を使った肝臓や脾臓、胸部などの局所温熱療法と、もう一つは腹膜転移や胸膜転移に対する温熱灌流化学療法です。

電磁波温熱療法は、身体の一部に限局して、しかも大きな血管などに浸潤していて外科的に取れない症例が適応です。肝臓がん、転移性の腫瘍、脾臓がん、直腸がん、再発乳がん、肺がん等ですが、多発していたり、他にも切除できない転移がある場合、つまり癌が直径15cm程の範囲に収まっていることが必要です。熱を加えることによって効果が増強される抗がん剤や、放射線治療を併用する事で効果が上がります。脾臓癌は、見つかったときすでに手術不能である場合が70%もあり、切除できてもその生存期間は平均して2年に達しない、特に悪性のがんです。福井大学では、進行しすぎて取ることができない脾臓癌に対して、積極的に開腹手術と術中術後の放射線治療、化学療法を併用して効果を挙げています。

大腸がんなどが腸の外側にまで及んで、お腹の中にこぼれ落ちて腹腔内全体で発育する、腹膜転移では、手術で取り去ることはできず、従来の化学療法でも効果が上がりませんでした。一般的には、腹膜転移があった場合は外科的治療は行いません。福井大学では、大腸、直腸癌の腹膜転移や、虫垂原発の腹膜偽粘液腫などに対して積極的に開腹手術を行い、できるだけ腹膜転移を切除し、切除できない腹膜全体に散布された細かいがんは、腹腔内温熱化学療法（HIPEC）で治療しています。この治療方は、今ではヨーロッパの多くの国で標準治療として行われているにも関わらず、日本では限られた施設でのみ行われています。今回、福井大学での治療方や成績についてお話しします。

■略歴

昭和28年 8月15日福井市生まれ(本籍地は駅前のユアーズホテル)
昭和47年 3月 福井県立藤島高等学校 卒業
昭和54年 3月 関西医科大学医学部医学科 卒業
昭和54年 6月 金沢大学第二外科・研修医
昭和62年 9月 金沢大学・大学院 卒業
昭和63年 4月 福井医科大学第一外科・助手
平成 4年 6月 ミネソタ大学 Visiting associate
平成 7年 4月 福井医科大学第一外科・講師
平成12年12月 福井医科大学手術部・助教授
平成15年 4月 福井医科大学第一外科・助教授
平成18年11月 福井大学医学部がん診療推進センター長・診療教授
平成23年12月 福井大学医学部がん診療推進センター長・教授
平成25年 4月 福井大学医学部腫瘍病態治療学教室教授・兼任
日本消化器外科学会評議員、指導医。
日本外科学会、指導医。
日本静脈経腸栄養学会、代議員、北陸支部会長。
日本緩和医療学会、代議員。
日本ハイパーサーミア学会、理事。

